

# 図書館通信 —82—

1987. 12

## 浜松分館雑感

附属図書館浜松分館長 大山 襄

今まで多少の不便さを感じながらも、特に文句を言うでもなく、なんとなく利用してきた浜松分館だが、今回いやおう無しにそれについて考えなければならない立場になった。分館増築は数年前に終り面目を一新した。昨年の電算機導入により貸出手続は利用者にとって格段に簡便になった。

(反面、返却は融通をきかせてくれなくなった。)これからは、宝の持ちぐされにならないよう、多面的に電算機を使おうということのようだ。為すべき仕事はたくさんありそうだが、新米分館長には今ひとつピンとこない。という事で、図書館について、特に浜松分館について感じた事を書いてみる。

数年前、早稲田大学の前を通った。休日なので正門の扉は固く閉ざされ誰も入構できないようだったが、その脇の図書館は開いていた。「へえ。図書館だけは開いているのか。」と半分感心、半分奇異に感じながら通り過ぎた。「大学にとって図書館とは」などと考えていると、ふとその事を思い出した。

「その大学がどんな図書館をもっているかが、大学を評価する基準の一つである。」などと言われる。だが、現今生産される膨大な情報を、特定分野に限っても網羅する事など、大図書館でも困難な現在、浜松分館ごときができてくもなく、その機能も変わらざるを得ない。本や雑誌をせっせと買い込むよりは、電算機をフルに利用して全国的な情報ネットワークを利用する方向に進むのだろうか。そうなると、静大図書館・浜松分館は「全日本大学図書館・浜松分館」に変身するのだろうか。研究者であれば、論文の末尾にあげられている参考文献がキーボードを叩くだけで手に入ると便利だなと思わない人はいないと思う。早くそうなってほしいと思う。でも、そうになったら読まない論文のコピーで研究室が埋もれてしまうのかな。

研究機関としての図書館はますます機能的にな

るだろうが、教育機関として、学生との関係はどうなっていくのだろうか。

この夏、工学部で高校生を招いて学部の紹介をする催しがあった。研究施設見学のコースの中に図書館が加えられた。「高校とは全く異なり、大学の施設中で最も大学らしいものの一つ」というわけである。館内をぞろぞろ歩く高校生の列が雑誌架の前に来た時、「おい、見ろよ。英語の本ばかりじゃないか。」という声が聞えた。彼は一体どう感じたのか。一層の知識欲に駆り立てられこの図書館を利用する日を夢見たのだろうか。それとも、工学部に来てまで英語に苦しめられてはかなわんと思ったのだろうか。

さて、諸君の先輩、工学部学生はこの浜松分館を一体どう利用しているのだろうか。

図書館はキャンパスのほぼ中央、どの建物からも歩いて3分、閲覧室は広くて清潔、貸出手続は電算化により瞬時に完了。だが、「利用しやすい図書館」即「利用してみたい図書館」とはいかないようだ。設備が変わろうと、手続が変わろうと、一日30冊程度、学部学生一人当たり年間6冊程度の貸出ペースは崩れないし、閲覧室が混んだためしは無い。所詮、学生の図書館利用は昔も今も、また今後もこの程度が普通なのだ、と思えばよいのだろうか。

では、工学部学生はどんな本を借りているのか。分類別貸出統計によると、自然科学・工学関係の図書(雑誌を除く)が95%で、この数値は過去数年驚くほど一定不変である。専門課程に進学した学生の、専門に集中する姿がここにある、と喜んでよいものかどうか。面白いことに、95%という数値は購入図書のうち自然・工学系の占める割合にはほぼ一致している。ということで、書架を一巡してみると、なるほど社会、歴史、文学、芸術といった書物はほんの少く、また、自然系でも工学に直接関係しない医学、農学、天文学、地学等もまことに貧弱である。もともと静岡の本館の多

様さとは比較にならないのは当然としても、「教養よさようなら。専門よ今日は。」を目のあたりに感じる感じがする。社会的責任を自覚した技術者の養成、全人的教育、そのために一般教育と専門教育のくさび型カリキュラムの必要、等々の掛け声が空しく聞えてくる気がする。

「図書館通信」の先生方の文章によく「私は若い頃これこれの本によって大いに感動し啓発された。」とって専門と全く関係ない本があげられて

いるのを見る。自分の啓発されたそのような本も学生用図書を推薦する中に加えてほしいと思う。

学部・学科の図書室とちがって、小なりとはいえ浜松分館は中央図書館の分家の家柄であり、いろいろな分野の書物があって当然だと思う。読んでみない本が、いろいろ、いっぱいあってこそ図書館で、そうなれば、学生にとってもっと魅力的になり、浜松分館も繁盛するのかな、と調べてみたりする。

## 私 と 新 聞

春 山 俊 夫

私が古い新聞の収集を始めてから10年余になろうか。このことが新聞で紹介されたり、人々から新聞収集に取組み始めた動機などの質問を受けることもある。そこで「私と新聞」について、その一端を書き留めてみた。

昭和32年に静岡大学図書館は掛川市の河井家より大量の新聞コレクションの寄贈を受けることになった。明治から大正期にかけての貴重な新聞である。この新聞は当時の河井家当主で衆議院議員も勤められた河井重蔵が集められたもので、その子息で元参議院議長であった河井弥八氏（昭和35年歿）よりの寄贈である。新聞は弥八氏が子供のころ、父重蔵や家族・近所の人々（この新聞には回覧した形跡がある）の閲読後に土蔵の中に整理保存していたとのことである。この土蔵の改造を契期に当館が寄贈を受けることになった。

河井家へ新聞の受領に参加したのが「私と新聞の出合い」である。受領には、寄贈のために仲介の労を取られた本学法経短期大学の原口清先生（現名城大学教授）をはじめ、図書館より中野正三事務長（故人）、島村敏子さん（現整理課和書係長）など数人で、2月の風の強い寒い2日間を要した記憶がある。土蔵の中よりほこりを被った古い新聞を破損に気遣いながら取り出し、運送会社の用意したコンテナに詰める作業は重労働であった。

それから、長期間この図書館を離れていた私は、昭和48年に元の職場に戻り、この河井家の寄贈新聞に再会できた。新聞は合本整本してあったが、目録が作成されていない。私は暇を見て「河井家寄贈新聞目録」の作成作業に取り組み、ほぼ1年を費し完成にこぎつけたのが昭和50年9月であった。目録には所蔵新聞の年月日まで記入した。現在でも利用するのに便利であると学内外の研究者より目録の要求がある。作成して良かったと思う。

昭和53年10月、前述の原口清先生を会長に本学教養部の田村貞雄先生を事務局長として静岡県近代史研究会が設立された。この会は研究資料の収集、整備が目的の一つであり、新聞も研究資料として重要であるとしているところから、私はこの会に興味を持ち、入会し、会員の協力と共に主として静岡県内発行の新聞の調査に当たった。調査により発掘する新聞は当館をはじめ公共図書館、大学図書館等には所蔵されていないものばかりである。図書館は新聞を図書館資料として軽視しがちで、系統的に収集保存する態勢がなかったのであろう。

静岡県で最初の新聞『静岡新聞』は小出東嶂、太田千彦などにより明治6年2月の創刊である。この新聞は和紙木版刷の冊子体で、題字の上に「官許」の朱印があるところから『官許静岡新聞』と通称されている。当初は週2回刊をめぐしていたが、明治9年4月までに40号までの刊行が確認できる（この40号の附録は本学教育学部の前身である静岡師範学校の開校式の特集号である）。この40号のうち確認できた現存紙は32号分で、第1—13号を東京大学明治新聞雑誌文庫が、同じく第1—8号を静岡県立中央図書館の所蔵で、他は個人の数部ずつの所有である。すなわち、現存紙32号分のうち13号分が一般の研究者が利用できる図書館の所蔵で、他は個人の所有である。

以後、新聞は多くの創刊、改題、廃刊等を繰返してきた。明治期の主な現存紙は静岡県小笠郡大東町の鷺山家に明治9—17年ごろの『静岡新聞』、『函右日報』、東京大学明治新聞雑誌文庫に明治12—23年ごろの『函右日報』、『静岡大務新聞』、静岡県周智郡春野町の酒井家に明治20—22年ごろの『絵入東海新聞』、『東海日報』、当館の河井家寄贈新聞に明治30年以後の『静岡民友新聞』などがある。もちろん、これらの新聞にも多くの欠号が

あり、これ以外にも多種の新聞の刊行がある。今後も調査の続行が必要である。

新聞調査の結果は『静岡県近代史研究』に「明治前期静岡県内発行新聞所在目録」として連載中である。現在8回まで続けた。発見された現存紙は所有者のご厚意によりコピーし、当館に収めてきた。また東京大学明治新聞雑誌文庫などと協力してマイクロ化も進めた。

日本の代表的新聞は政論新聞から出発し、報道性を強めてきたが、近代史の一コマコマを刻印している。それだけに近代史研究にとって基本的

な研究資料である。政治や経済だけでなく、教育、文化、しいては自然科学の分野についても貴重な資料として利用されており、最近の研究書の中には新聞を資料としたものを見かけることも多々ある。失われた記録「新聞」を何とか取戻したいものである。学術情報ネットワークがさげばれている現在、研究資料の収集、整備は大学図書館にとって重要な仕事である。新聞もその一つではなからうか。私の新聞との付き合いでの感想である。

(附属図書館専門員)

## 情報検索について

### 1. いろいろな情報検索？

図書館のコンピュータ化に伴い《検索》についての質問が、数多く寄せられるようになりましたが、質問の主旨に少なからずの混乱がみられるようです。質問の中心となっているのは、これから我が図書館内で作られるべき、図書・雑誌の所蔵データの検索のしかたについてのようです。それならば、静岡大学内という、小さな閉じられた系の中での話のはずです。ところが、質問者の頭の中にある前提が、それとは大いに異なっているらしいのです。

静岡大学の所蔵データにすぎないものが、あたかも DIALOG、UTOPIA といった大規模なデータベース・サービスのようなものであったり、あるいは、今回のコンピュータ化のキーワードともなっている「学術情報システム」そのもの、というふうに思われているようなのです。

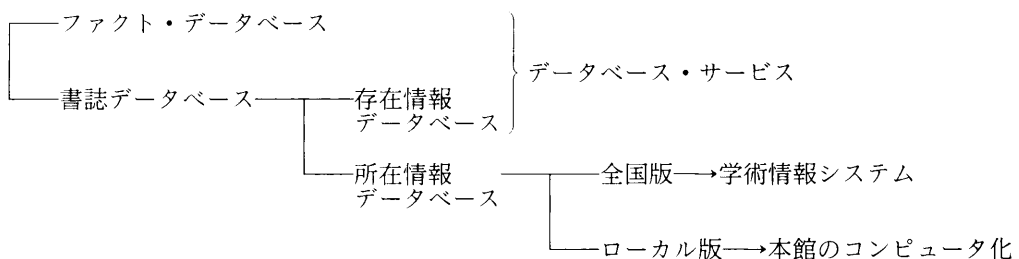
小なりといえども、データベースであることは確かであり、端末に向かって検索するという意味

でも、同じではあっても、我が館内のものと、データベース・サービスや「学術情報システム」とでは概念がまったく異なりますし、目的とするところも違います。もちろん、それらは同一のシステムの上には存在しませんし、アプローチの方法も異なります。

また、同じものであるとしてくくったデータベース・サービスと「学術情報システム」も、実は概念的には、まったく別物だと言って過言ではありません。

本稿では、データベース・システムを下図のように分類し、それらについての概念と、それぞれに対してのアプローチのしかたをのべようと思います。そして、それらの間の違いについて認識していただくとともに、我が図書館内で形成されるべきデータベース＝図書館のコンピュータ化について理解を得たいと思います。

〈第1図〉



## 2. ファクト・データベース

書誌データベースの形成を、これまでの図書館が行ってきた業務＝カード目録の作成に擬似するものと考えた時、ファクト・データベースのそれは、図書館に所蔵されるべき図書や雑誌そのものの作成と考えて良いでしょう。

ファクト・データベースが収録するものは、気象情報の集積であったり、株式市場の変動値、あるいは各種の統計数値など、まさに事実に関する生のデータです。九州大学で保持されているトーマス・マン・ファイルや各新聞の記事ファイルも、ここに含まれる、という考え方もあります。

図書の形でも「枕草子索引」や「Shakespeare concordance」などは我が図書館で最も頻繁に利用される資料ですが、ファクト・データベースの目的とするところは、それらがより精密に（さらに重要なことは）利用者が自らの目的にかなった形で展開できるようにすることにあります。

また、最近注目を集めているものに、新聞各社のニュース・サービスがあります。たとえば、日本経済新聞のそれでは、午前 11 時ごろには、その日の夕刊の記事を端末で見ることができ、その内容も刻一刻と変化していきます。

書誌データベースが、現実の問題として図書館のあり方を変えようとしているのに対し、ファクト・データベースは、学問の方法や意義に大きなインパクトを与える可能性を持とうとしています。

## 3. 存在情報データベース

《存在》情報というのも、苦しい言い方ですが、次項の《所在》に対立するものだと考えていただきたいと思います。この型のものは、利用者が対象となる文献そのものを手に入れる可能性については、まったく考慮がなされていません。目的としているのは、この世の中に存在するだろうすべての文献について、それらの存在をもれなく明らかにすることにあります。目的となるべき文献の所在については、一切関知していません。それで、その主目的からすれば、単なるリストでも良いわけで、実際、当初は雑誌の形をとって、文献のラレットとして刊行されていました。代表的な例が Chemical Abstracts です。

世界中の、すべてを、もれなく、となりますと膨大な量を収録することとなり、Chemical Abstracts などは、週刊誌にもかかわらず、23 区ごとに分割される以前の東京の電話帳ほどのものとなっています。で、電話帳がそうであるように、対象を限った分割版も出版されていますが、それ

でも量の多さには変わりありません！ ましてや、とつくの昔に見限られていたはずの超伝導が、急に脚光を浴びる世の中、広い目くばりが必要、となりますと分割版の使い勝手の悪さは目をおおぶばかり。

そこで、コンピュータで利用できる形でのデータの提供が行われるようになったわけです——実際のところは、冊子版を作成するのに、コンピュータの利用が不可欠になってしまったほうが先で、その副産物として登場してきたのです。新聞各社のニュース・ファイルと同じ事情です。ところが、コンピュータで検索する方が楽ですから、利用者のニーズがコンピュータ版の方に移ってしまい、冊子体の刊行が危ぶまれるものも出てきている状況です……。

膨大な量のデータを操作するとなると、それに使用されるコンピュータも、きわめて大きなものとなり、そこで、センター的な機関がデータベースの運営にあたり、利用者は、ネットワーク網を通じて使用する、という形態をとることになります。

主だったものをあげますと、東京大学の TOOL-IR/ORION、筑波大学の UTOPIA、日本科学技術情報センターの JOIS、国文学資料館の検索システム、そして、学術情報センターの NACSIS-IR（後述の学術情報システムとは、まったく別物です）となりますし、世界的規模では DIALOG が有名です。

これらのものは、簡単なエントリーののちは、電話回線を通じて利用できますので（もちろん、国立大学系のもは、大学間ネットワークを通じて利用できる）、きわめて安価に利用できます）、どこからだれでも、というわけで、各システム共使い易さを目ざしてしのぎをけずっており、きわめて簡便で強力を検索手段を提供するようになっています。

次ページの例は、筑波大学の UTOPIA で運用されている ERIC の検索例です。ERIC はアメリカで作成されている教育分野での世界的なデータベースで、ここでは、「ストーリー・テリングによる心理学的療法」という主題で検索しました。教育学や心理学の素人でも、この例では 5 分間以内で済みます。専門家の方でも、コンピュータを使わずに、この結果を得ようとするれば、一苦労が必要だと思えます。

とはいえ、サーチャーなどという職業が登場し脚光をあびている現実、情報検索が世に言われるほど簡便・明瞭でないことも事実で、当分の間は、簡便性を求めれば精度が落ち、精度を求めれば

ば手数がかかる、という状況は続くでしょう。

#### 4. 所在情報データベース

図書・雑誌などの現物があり、その書誌情報をデータの形として積み重ねていった結果のものです。我が図書館でいえば、蔵書目録・雑誌目録ということになります。それを全国規模で行おうとしているのが「学術情報システム」です。

#### 5. 「学術情報システム」

全国に数百の大学があり、そこここで同じ図書を購入し、その図書を元に、あちこちでまったく同じカードを作成することに精を出している、とするなら、どこか1カ所でそれを作り、他のところは、それを流用する、と考えるのは当然ですし、さらに、すべてを各図書館に遷元してしまうのではなく、共有の財産として活用したいと思うのも当然でしょう。

アメリカでは20年以上も前から行われてきたことですが、我が国では学術情報センターを核とし、全国の各大学が手足となる「学術情報システム」が最初の試みといって良いでしょう（小規模な形では、存在していました）。

国内の資料に関していえば、結果として前項の《存在》情報の様相をおびてきますし、運用の形態もネットワークを通じてということになり、前項のデータベース・サービスとの混乱が生じてくるという次第。

各図書館でバラバラにデータを作成する場合、理念としては全国どこでも通用する標準的なものを目指してはいても、実際には各個のニーズにさえ合致していれば良いことから、それなりの手抜きは可能でしたし、場合によっては、手を抜く必要もありました（単科大学で、専門以外の部門で必要以外のデータを取り込むと思わぬ混乱をひき起こすでしょう）。各個の要求に合った水準での、そこ独自のオーソリティさえ持っていれば良かったわけです。

「学術情報システム」では、全国レベルのオーソリティを要求されますので、すべてのデータに対して《手抜き》の無い作業が要求されることとなります。それは、逆の見方をすれば、ネットワーク網を通じて作業が分割されることによるのみ成立することを意味します。

各図書館にしてみれば、作業の一部を分担するだけで、すべての分野にわたって高水準のデータを得ることが可能なわけですが、それは、作業への数多くの図書館の積極的な参入があって初めて可能なこと。システムとして安定するまでは、お

```
*****12/15/87 11:06:24***
* WELCOME TO UTOPIA *
* -- RETROSPECTIVE SEARCH -- *
* UNIV. OF TSUKUBA, S.I.P.C. *
*****
```

```
RS> SEL CIJE
RS> SEA TWD TELLO
1396 DOCUMENT(S) FOUND
RS> SAVES $1
RS> SEA TWD STORY OR STORI@
3119 DOCUMENT(S) FOUND
RS> AND $1
522 DOCUMENT(S) FOUND
RS> SAVES $2
RS> BRO TWD THERAPY
```

```
BROWSING OF ELEMENT 'TWD'
W-NO. RECORDS VALUE
```

```
#00001 870 THERAPISTS
#00002 1 THERAPIZING
#00003 2 THERAPLAY
#00004 1 THERAPSID
#00005 1 THERAPUETIC
* #00006 4248 THERAPY
#00007 2 THERPY
#00008 5809 THER
#00009 23 THERAFTER
#00010 299 THERBY
#00011 1 THERRE
```

```
RS> BRO TWD PSYCHOTHERAPY
```

```
BROWSING OF ELEMENT 'TWD'
W-NO. RECORDS VALUE
```

```
#00012 2 PSYCHOTHERAPY
#00013 1 PSYCHOTERAPIE
#00014 11 PSYCHOTERAPIES
#00015 35 PSYCHOTERAPIST
#00016 51 PSYCHOTERAPISTS
* #00017 1333 PSYCHOTHERAPY
#00018 2 PSYCHOTHERPAY
#00019 108 PSYCHOTIC
#00020 23 PSYCHOTICISM
#00021 8 PSYCHOTICS
#00022 1 PSYCHOTOMIMETIC
```

```
RS> SEA TWD #6 OR PSYCHOTHERAP*
4248 DOCUMENT(S) FOUND
RS> AND $2
3 DOCUMENT(S) FOUND
RS> OUT EL(A T J B)
```

```
#1 A THURSBY, DEANNA DILLON
T EVERYONE'S A STAR
J TEACHING EXCEPTIONAL CHILDREN
B ?; 3; 77-8

#2 A O'BRUBA, WILLIAM S.;CAMPLESE, DONALD A.
T BEYOND BIBLIOTHERAPY: TELL-A-THERAPY.
J READING HORIZONS
B V20 N1 P30-35 FALL 1979

#3 A CRAGO, HUGH
T THE PLACE OF STORY IN AFFECTIVE DEVELOPMENT
: 1
J IMPLICATIONS FOR EDUCATORS AND CLINICIANS.
J JOURNAL OF CHILDREN IN CONTEMPORARY SOCIETY
B V17 N4 P129-42 :SUM 1985
```

上記の例は標題等から取り出された索引語だけを対象とした、もっとも原始的な方法です。ERICには、シソーラス、ディスクリプター等が完備されていますので、本来は、それらを駆使した精密な検索をすべきでしょう。この格好な手引書として、中山和彦・及川昭文・三輪真木子著「ERIC入門」(丸善)があります。

また、各種のデータベース・サービスのマニュアルが、参考調査係にありますので、御利用下さい。

いそれと乗れない、というのが本音ではないでしょうか。また、学術情報センターにしても、核となるべきハードとソフトを提供しているという強味はあっても、かんじんな所在・書誌情報の蓄積が無いからには、各図書館からの協力がなければなにもできない、というのが現状。つまり、こゝ、「学術情報システム」なるものは、各図書館にしても、学術情報センターにしても、あくまでギブ・アンド・テイクのうえに成立するものです。

システムとして安定すれば、偉大な成果を發揮するでしょうが、それまでは試行錯誤を重ねていくほかはありませんし、各研究者ベースでいえば、当面はまったく関係の無いものといって良いでしょう。雑誌のデータが、TOOL-IR 上で運用されたり「学術雑誌総目録」として公開されているように、図書のデータも、別の検索システムに移され運用されたり、図書の目録として出版されることによって研究者のものになると考えられます。

それまでは、図書館の試行錯誤として、あたたかく見守っていただきたいと思います。我が館も、来年からは本格的に参入しますし、システムとしても、急速に安定にむけて進んでいるようですから、このシステムの成果が研究者に還元される日も、思いのほか早くおとずれるでしょう。そして、還元されるそれは、前記のデータベース・サービスの性格を持ち、なおかつ全国規模の所蔵目録であるという、世界でもユニークな情報検索システムです。

## 6. 本図書館のコンピュータ化

これまでの景気の良い話とは逆に、きわめて現実的な様相をおびた、せつない話となります。我が館のシステムは、コンピュータが膨大な量のデータを瞬時に処理する、というところから想起されるような大きなシステムではないのです。データベース・サービスの世界中、学術情報システムの日本全国ではなく、あくまで、静岡大学で所蔵されている（正確には来年度以降に所蔵されるだろう）資料に関するものです。すなわち、歩いて手にすることができるハンシイの資料に関してのシステム、ということになります。

それに見合っ、というわけでもありませんが、ハードもソフトも、前項までに使われるものと較べ、ちいさなものとなっています。また、人的資源も限られています。本来は、理想的な形を検討すべきでしょうが、当面は限られた資源の中での最大の効果、という点を追及するしかありません。

歩いて手に入るハンシイに存在する資料に関してのデータベースであり、その情報検索である限り、我が館で作られようとしているものは、基本的にファイリング・リストであるべきだと思います。そして、ファイリング・リストである、ということは、特定検索（データベース・サービスの項でみたような論理式を駆使した主題検索ではなく、○×というタイトルの本は？ ×○という著者の本は？ という風に、検索の対象が特定されているもの）でのアクセス・ポイントを増やすことが、最も目的にかなったこととなります。

検索方法が簡便であることが重要ですし、何よりも、検索手段と、その検索で提示された資料の状態（図書館のどこにあるのか、あるいは、貸し出しされているのか、貸し出されているとしたら、いつ返却されるか）と結びついている必要があります（後者は、カード目録には出来ないゲイトウであります）。

主題の論理和を求めて、検索の範囲をせばめていくという方法は、本質的に《存在》情報に関するものであって《所在》情報についてのものではありません。ここでは、サーチャーなどというものがソンザイするような余地を残してはいけませんし、ましてや、限られた資源の中で、そのためにハード・ソフトに過大な負担をかけるとしたら、それは理念ではあっても、目的のための目的、といわれてもしかたがないでしょう。

## ■おしらせ

附属図書館では、冬期休業期間中、下記のとおり実施しますのでお知らせします。

記

### 1. 休館

昭和 62 年 12 月 23 日(水)より昭和 63 年 1 月 4 日(月)まで休館となります。(備考)新年は 1 月 5 日(火)より開館しますが、1 月 9 日(土)まで延長開館は行いません。

### 2. 貸出期間の延期

昭和 62 年 12 月 7 日(月)から 63 年 1 月 9 日(土)の間に貸し出した図書の返却期限は、昭和 63 年 1 月 18 日(月)とします。

● 18 日は混みあいますので、返却可能な方は 14 日以前にお返し下さい。